

児童発達への文化人類学的アプローチ

—親たちは児童期をどのように概念化するか—

小林 修典 (ノートルダム清心女子大学)

1. 文化人類学での児童期の概念化 文化人類学では、児童期のイメージは、文化がどのように概念化されるかによって変化してきていて、そうした概念化は、1)文化の型が子供の心理発達に影響を及ぼし、児童期は文化の型の表現として概念化される(ミードら)、2)文化とパーソナリティーは機能的な相互関係を有し、児童期は文化のシステムの中の一つの歯車と考えられる(ホワイティングら)、3)文化はルール、スキーマ、モデルとして概念化され、子供はこれらを発達のプロセスの不可欠な部分として学び、自分自身の環境と発達を形成していく積極的な参加者である(ハークネスら)、4)文化の成員である親たちが自分たちの子供の発達をどう考えているかが、文化をつくり出し、表現する(ルヴァインら)と要約できる(Harkness 1996)。三・四番目の概念化は、どのようにして人の思考が文化的に組織化され、どのように思考が行為に影響を与えるかという関心に基づき、研究の対象を人の行動から認知に移行させたものであり、文化人類学的観点からの児童発達研究での最近の動向となっている。中でも特に、四番目の、大人たち自身の児童期の概念化は、それまで強調されることのなかった、児童発達の環境の形成における大人たちの役割に焦点を当てたものとして注目されている(Harkness 1996, 箕浦 1990)。本研究では、このような傾向の研究例として、親たちの児童期の概念化の先駆的研究として、評価の高い、ロバート A. ルヴァインの「親たちのゴール」(1974)を分析する。

2. 親たちのゴール 文化人類学では乳・幼児期の環境が道徳や社会的相互関係の規範などの文化的価値観によって形成されることが議論されてきたが、ルヴァインは、文化的価値観以外に子供の環境に影響を与える要因があり、それは、子供の生存と発達のために環境の変化にどう対応するかに関して、数世代にわたって確立された方法であると提案する。ルヴァインの観点は、文化的価値観が育児に与える影響は、環境の圧力への適応という文化的に組織化された体系というコンテキストの中に位置づけられるべきだという、<文化=進化論>的立場である。彼の育児の普遍的なモデルの形成は、彼自身の西アフリカでの現地調査や他の研究者たちによる南米、欧米からの報告に

基づくものである。

「親たちのゴール」は、子供の発達を親の視点から捉えようとする試みであり、文化的に異なる乳児保育の型がどのように作られたかを説明している。ルヴァインは次のように主張する。まず、文化は親が育児の務めを認識する方法に寄与する。このような親の育児の認識方法は、民族内で以前に経験されて文化的伝統の一部となった、環境上の不慮の出来事に関する情報を含んでいるという意味で合理的である。この情報は、子供の健康や福祉に見られる環境上の特徴及び、それに対する反応についての情報である。そして、このような慣習化された規定に従う親の行動は、彼らが気づいている以上に適応力がある。

自分たちの観点よりも子供の観点到立ったとき、即ち、子供のために、親たちは何を求めるかという問い掛けに対する答えとして、親たちが、育児実行者として自分たち自身に設定する基本的な三つのゴールをルヴァインは提案している。1)子供の生存と健康、2)成長後の経済的自立のために必要な子供の行動能力の発達、3)文化的に顕著な信念や規範や観念形態において形成されて、象徴的に詳細化された価値観を最大限に高めるために必要な、子供の行動能力の発達である。二番目と三番目のゴールは、箕浦(1990)の紹介するウィルバート(1979)の文化化の三側面で用いられている言葉を用いると、それぞれ、2)技術訓練と社会化、3)道徳的陶冶と概念化することもできよう。

ルヴァインの三つのゴールは体系化されていて、ゴールの間には段階が存在する。もし1)の子供の健康と生存が脅かされると、それが親の一番の関心事となり、2)が脅かされると、2)がゴールの最高位を占めるが、それは、1)は2)と3)の必要条件であり、2)は3)に必要なからである。このようなゴールの体系で何か親の最大の関心事になるかは、それぞれの社会での子供を取り巻く環境を反映したものになり、何か育児で最優先されるかに文化的偏差が生じる。ルヴァインは育児の最優先事を二つの固体群に分けて説明する。1)乳児死亡率の高い社会では、親が最優先して心配することは子供の安全と健康であり、2)生計のために比較的乏しくて不安定な資源しかない社会では、親の最優先の関心事は、特に子供の生存が確実となつてか

らは、子供の将来の経済的自立である。こうした関心事に対応すべく発達した慣習は、親たちの不安感を取り除いたり、不安を感じさせないようにする傾向がある。

1) 乳児期の概念化 乳児死亡率の高い社会の母親にとって、子供の将来の達成のために乳児の認知発達を刺激することは理解できないことであることをルヴァインは指摘する。この母親にとって乳児期とは、子供の行動能力を考える必要のない生存のゴールを中心に構成されている期間として文化的に定義されたものである。反対に、死亡率の低い社会の病弱な子の母親は、文化的に慣習化された子供の早期の行動能力の発達を育児から排除することはしない。生存が一番の問題とわかっていても、彼女自身が文化の産物である以上、乳児期を生存と健康の期間と見做せないのである。

2) 生計の圧力と従順さの訓練 生計の圧力と育児の関係は、個人の経済的失敗に対する保護を目的として計画された育児方式の発達に関するものであり、こうした育児方式での親の関心として、ルヴァインは、乳児期から思春期の子供に奨励される素質としての従順さの強調を取り上げている。農耕社会では、親は子供の労働力の即時の利用を目的に子供から従順さを要求するが、資源へのアクセスの限られている社会では、アクセスを可能にしてくれる後援者に自己証明をするための従順さを子供のために親は求める。

農耕民族の育児での従順さの強調は、欧米の育児の価値観と対比的と思われる。しかし、ルヴァインは、欧米でも社会階層の間に従順さに関して違いが存在することを指摘する。欧米の中間層は、自己管理と自主性を子供の成長課程で重要な素質と見做すが、労働者階層の親は、外部からの抑圧に服従、順応することを強調することをコーンら(1969)の研究を用いて説明している。欧米の労働者階層には、子供の労働力そのものは重要ではないが、子供が将来、労働者として直面する職業上の要求を満たすことができるように従順さを育児で強調するというのである。中間層の親たちは、経済的安定性の故に、育児のゴールの二番目よりも三番面に集中できる。しかし、労働者階層の親達の環境は失敗と危険の危機にさらされていて、彼らの育児の概念は、二番目のゴール、即ち、子供の将来の経済的自立に強く支配されているのである。このように、親たちのゴールは、同一文化内でも階層によって異なることがあり、育児の方式の形成において文化的価値観よりも環境の圧力が先行することがあることが、このルヴァインの研究が主張するところである。

3. 日本の児童観 ルヴァインの「親たちのゴ

ール」のモデルを用いると、乳児死亡率が低く、経済的に安定した社会である現代の日本の親たちは、乳児期は生存のためだけの時期とは見做さず、二番目のゴールの、子供の将来の行動能力の発達を当然視し、早くから三番目のゴールの、文化的価値観の習得を目指した育児を計画する、と説明できる。二番目のゴールは子供の義務教育の終了と考えられよう。生存や生計という環境の圧力への適応というマクロレベルでは、日本の親たちの目標とするものは欧米の先進国のものと同じである。しかし、そのような目標を達成するための育児のパターンは、文化固有の価値観を反映したものとなっている。例えば、子供の従順さは、「すなお」という日本語に訳されると、自主的な協力という積極的な意味を持つ文化的価値観となり(White & LeVine 1986)、欧米の、経済的危機を経験しやすい階層の親たちが生計の圧力への対応として子供のために求めるものとは区別される。なお、日本にもかつて農・漁村を中心に、生計の圧力が育児観へ影響を与えたことが躰けの変遷における例として報告されている(広田1999)。

日本の児童観の概念化に関して強調されるべき点は、高度経済成長期以来、親の抱く子供のイメージが変化し、その結果、子供を取り巻く環境に変化が見られるようになってきていることである。即ち、1)産児制限の普及により、子は授かりものという考えから、子供は「つくるもの」に変わり(箕浦 1990)、2)少子化を背景に、「少ない子供を大事に育てる」志向が一般化し、「親の自己実現としての子供の成長」を期待するようになった(広田 1999)のである。このような親たちの意識の変化は、彼らの育児の実践に反映されている。子供の出生そのものがコントロールできるという考えは、子供の過度の甘やかしや虐待と結びつき、親の達成感を満足させるために、子供の発達段階を無視した早期教育が行われることもある。また、所謂「生きる力」という子供の自立能力が問題となるのは、ルヴァインの二番目のゴールの強調されるべき子供の発達段階で、それを飛び越えて三番目のゴールが追求されていることへの反省とも言える。このように、子供の自立のための技能習得や社会化、更に文化的規範の習得を子供のために願うことが親たちのゴールとして存在しながらも、子供たちが自立できる環境が充分と言えないようになってきている。環境の圧力と無縁な親たちが子供のためにと願いながら実践している育児が、実は子供から多くを求めるものになっているのかもしれない。

主要文献: ロバート A. ルヴァイン「親たちのゴール」『文化と人間発達』大学教育出版 1996。